

令和元(2019)年度 病害虫発生予報 第6号

令和元(2019)年9月19日
栃木県農業環境指導センター

いちごの病害虫発生に注意しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生は少ない(平年比19%：ほ場率)。(－)
・ 向こう1か月の平均気温は高く、降水量は平年並の見込み。(±～＋)
- (3) 対 策 ・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 水滴の飛散等によって伝染するので、できるだけ水の跳ね返りのないかん水を行う。
また、かん水はできるだけ晴天日の午前中に行い、曇雨天日や夕方のかん水を控える。
・ 症状が出てからの防除は困難なので、予防を主体にセイビアーフロアブル20等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [植物防疫ニュース No. 7](#)、[薬剤感受性検定結果 \(QoI 剤\)](#)を当センターHP(ホームページ)に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生はやや少ない(平年比35%：ほ場率)。(－)
・ 向こう1か月の降水量は平年並み、日照時間は多い見込み。(±)
- (3) 対 策 ・ 軟弱徒長すると発生が多くなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・ 現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、保温開始前からフルピカフロアブル等を散布する。
・ 発生が見られたらベルコートフロアブル等を散布する。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(平年比32%：ほ場率、平年比21%：株率)。(－)
・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ カブリダニ類(天敵)導入時はハダニ類が多いと失敗しやすいので、気門封鎖剤などを定期的に散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
・ 気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
・ 葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い(平年比212%：ほ場率、平年比1023%：株率)。(＋)
・ 向こう1か月の降水量は平年並み、日照時間は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ 予防を主体に銅剤やダコニール1000等を散布する。発病が見られるほ場では、治療効果のあるプロポーズ顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 ねぎ ハモグリバエ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 抛 ・ 現在の発生量は多い（平年比 255%：ほ場率、平年比 1500%：株率）。（+）
 ・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 発生初期の防除を徹底する。
 ・ 被害葉及び収穫残さは本種の発生源となるので、残さはほ場内に放置せず、1ヶ所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。

6 野菜類（いちご・なす等）・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 抛 ・ 9月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。（±）
 ・ 向こう1か月の平均気温は高い見込み。（+）
- (3) 対 策 ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 ・ 幼虫の齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

7 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
きゅうり	褐斑病	やや多	平年並	キャベツ・レタス	タバコガ類	—	やや多
	うどんこ病	平年並	やや多		アブラムシ類	多	多
	コナジラミ類	やや多	多	ハダニ類	平年並	やや多	
ねぎ	黒斑病	やや多	平年並				

秋の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯病

・縞葉枯病が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は、媒介虫のヒメトビウンカの増殖源と縞葉枯ウイルスの獲得源になります。現在、ヒメトビウンカ成虫が平年より多く発生しているため、早急に丁寧な耕起を行いましょう。

○麦類種子伝染性病害

・近年、オオムギ斑葉病等の種子伝染性病害が増加しています。種子消毒を行うとともに適期には種ましましょう。

○いちごのアザミウマ類

・頂花房の開花が10月上旬以前から見られる施設では、秋期からアザミウマ類が発生しやすく、翌年の発生も早まる傾向があるため、適切に防除しましょう。

○ナシ黒星病（秋季防除）

・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

○農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

○同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間9月21日から10月20日 9月19日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わるとでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	20%	30%	70%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	30%	40%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。